

Title	故岡田泰男名誉教授追悼特集：経済学部における歴史研究：日本, アジア, そしてアメリカ：序
Sub Title	In memoriam professor emeritus Yasuo Okada (1937–2014) historical research in the faculty of economics : Japan, Asia and the United States : preface
Author	柳生, 智子(Yagyu, Tomoko)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2015
Jtitle	三田学会雑誌 (Mita journal of economics). Vol.108, No.2 (2015. 7) ,p.271(1)- 273(3)
JaLC DOI	10.14991/001.20150701-0001
Abstract	
Notes	故岡田泰男名誉教授追悼特集：経済学部における歴史研究：日本, アジア, そしてアメリカ
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20150701-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20150701-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 故岡田泰男名誉教授追悼特集：経済学部における歴史研究

—日本，アジア，そしてアメリカ—

柳生智子\*

故岡田泰男経済学部名誉教授が 2014 年 7 月に急逝されて早 1 年以上が経つ。2011 年末頃に病に襲われ闘病中であったが、その後御快復され、これから学会等でまたご活躍されることが期待されていた矢先の訃報であった。2014 年 4 月の経済学会には三田に元気な姿を見せておられたそうで、あまりに急で早すぎる死に驚きの念を禁じ得ない関係者も多かったことと思う。本特集は、長年日本における経済史研究、アメリカ史研究を牽引し、義塾経済学部の経済史研究の伝統の継承とその進展の中心として貢献し、歴史・理論等の隔てなく同僚や後身に慕われた岡田泰男先生を、深い感謝を込めて哀悼するために企画された。

岡田先生は経済学部の経済史研究者の中で、慶應の経済史の伝統を受け継いだ、最後の人物であったと言える。経済学部では指導教授であった高村象平元塾長、野村兼太郎教授、文学部の中井信彦教授、学外では早稲田の小松芳喬教授、一橋大学の増田四郎教授らによる指導を受けている。学部時代からアメリカの研究をはじめ、大学院時代やその後の助手時代（1962 年就任）にはアメリカの土地制度史を中心的な研究課題として取り組まれたが、その頃はアメリカがフィールドであったものの、経済学部の伝統的な、王道の経済史研究者として鍛えられた時期であったのではないかと思う。先生の経済史・歴史の地域を問わない高い見識、理論・思想の知見、資料の丹念な解釈等はこの時期の学びを土台にしていたのであろう。岡田先生のアメリカ研究者としての性格がより強化されたのは、1965 年にフルブライト奨学金を得てコーネル大学に留学し、公有地制度史研究の第一人者であったポール・ゲイツ教授の指導を受けてからではないかと思う。ゲイツ教授は本特集の拙稿に取り上げるアメリカ西部史の大家であるフレデリック・ジャクソン・ターナーの孫弟子にあたるが、西部史全般やその土地政策だけでなく、南部やカナダの土地制度、農業史、連邦政府の役割や南北戦争について等、幅広い題材を研究していたアメリカ史家であった。コーネル大学で履修したアメ

---

\* 慶應義塾大学経済学部

リカ史のコースワークと、大学から見渡す壮大なカユーガ湖の眺めは、幼稚舎以降、義塾の一貫教育で育ち、はじめて慶應の外に出た先生のアメリカへの探究心を大いに満たしたことは想像できる。

岡田先生はとりわけ『三田学会雑誌』に強い思いをお持ちであった。卒業論文の一部であった最初の論文こそ『林業経済』に掲載されているが、1963年の「アメリカ中西部における小作制」から、2012年1月の「経済史と現在：「経済史と現代」再訪」まで、生涯実に30本近くの論文を『三田学会雑誌』上に掲載している。後に『アメリカ研究』や『社会経済史学』に掲載された論文も、その土台は『三田学会雑誌』での論文であることも多かった。先生ご自身の研究室の近くにあった経済学会室は先生にとっても憩いの場になっていたようであり、『三田学会雑誌』の原稿の提出や修正等の学会秘書とのやり取りも、活発に行われていたのであろう。

岡田先生は経済学部助手として就任して以来40年間奉職され、その間、三田の歴史研究者はもちろんのこと、理論や政策研究の経済学部の同僚、また日吉所属の同僚とも非常に友好的関係を築かれていたようにお見受けした。国際センター所長等の要職も務め、学部外の教員やスタッフにも慕われた。学部生の指導ではゼミが25期に及び、とりわけ年齢的にもそう離れていなかった初期のゼミ生とは大変親しい関係を築いておられた。このように内外に広く慕われた先生であったため、今回の企画を進めるにあたって、岡田先生の幅広い経済史研究の知識に基づく研究上の交友関係を検討し始めると、執筆をお願いしたい方々は枚挙に暇がなかった。筆者と三田経済学部所属の神田さやこ教授とが共同企画し、苦渋の判断の末に人選を絞り、経済学部で特に長年に渡って先生と研究上の交流と親睦を深めていた方、学外もアメリカ研究者に限定し、その中で岡田先生にお世話になった方々を中心に執筆を依頼した。

折原卓美教授（名城大学）は岡田先生が博士論文の指導教授であり、西部の公有地処分や水資源の研究等において、岡田先生の西部研究の流れを汲んだ正当な後継者と言える。今回はアメリカの州の固有の権限であるポリス・パワーの変遷とアメリカ経済の発展の関係について、建国期から20世紀初頭にかけて論考で分析されている。須藤功教授（明治大学）は岡田先生との共編著『アメリカ経済史の新潮流』（慶應義塾大学出版会）もあるように、岡田先生がアメリカ経済史研究の次世代を担う研究者として期待し、指導・交流された研究者である。社会経済史学会やアメリカ経済史研究会（現アメリカ経済史学会）で長年学会活動を共にされ、互いの研究や後身の育成、アメリカ経済史研究の行方について協力し合ってきた。今回は、ご専門であるアメリカ金融史の中で、連邦準備制度理事会の支配者層の変遷についてご執筆いただいた。2014年3月に経済学部を退職された杉山伸也名誉教授も、長きに渡って同じ経済史研究者として岡田先生とともに経済学部奉職された。杉山教授は日本の産業革命研究についての所説を再考する論文をご投稿いただいた。同じく、2015年3月をもって経済学部を退職された元経済学部長の小室正紀名誉教授は、退職にあたっての最終講義

の内容であった井原西鶴の経済思想についての論考をご投稿して下さい。小室教授は長年、ご専門の日本の経済思想史の領域に加え、経済史の科目も担当されていたが、小室教授自身が経済学部の学生であった頃に岡田先生の「農業史」を履修したと伺っている。現在在籍している経済学部の教員の中にも、岡田先生の「西洋経済史」や「アメリカ経済史」の科目を履修した方は多いのではなかろうか。現在経済学部に奉職中の難波ちづる准教授、神田教授と筆者は1990年代後半に経済学研究科で同時期に経済史・社会史研究者を志し、指導教授や研究対象地域こそ異なるが、歴史研究の院生同士で交流を深めた仲間である。難波准教授は、フランス領インドシナが専門で矢野久教授、松村高夫名誉教授等の指導を仰ぎ、インドを研究領域とする神田教授は学部の頃から杉山教授の下で学んだ。筆者は学部時代から岡田先生のゼミに所属し、アメリカの南部地域の研究を進めてきた。本特集では、難波准教授は戦後フランスのベトナム人労働者のインドシナ送還について、神田教授はインドのベンガル地方フロンティアにおけるギリシャ商人の活動について投稿した。筆者は岡田先生の研究領域に近いものを、との思いから、アメリカ西部研究の動向についての論考に挑戦した。

難波・神田・柳生は大学院時代に岡田先生、松村教授、杉山教授による「経済史合同演習」を一緒に履修したが、少なくとも修士の学生であった筆者にとっては、まだ研究について何も分かっていない時期にあのような貴重な合同授業を履修できたのはその後の歴史研究者としての礎となったと言っても過言ではない。研究対象が全く異なる3人の歴史家による授業は時に意見が対立することもあったが、多くの場合は最後に岡田先生が角を立てることなく円満にまとめて下さったものである。

岡田先生亡き後、早々この企画を進めていたものの、筆者の原稿が遅れて経済学会や編集委員会には大変ご迷惑をおかけしたことをお詫び申し上げたい。アメリカ学会や社会経済史学会で編集委員長を歴任された岡田先生なら一喝されたであろう、とどこまでも不肖の弟子であったが、最後にはあの穏やかな独特の声で笑って許して下さるのではないかと勝手ながら思っている。先生がご存命の間に、より良い研究をお見せできなかったことは悔やまれてならないが、こうして微力ながらも、先生の思い出の深かった『三田学会雑誌』で企画を通して特集号に漕ぎ着けたことを喜んでいただけるのではないか。今はただ、感謝の念を持って、先生に教わったことを研究や授業を通して伝えていきたいと強く願っている。最後になったが、企画にご協力いただいた執筆者の皆様にはこの場をお借りして深くお礼を申し上げたい。